

方言地図作成史からみた特色

著者	小林 隆
雑誌名	方言文法全国地図
ページ	6-9
発行年	1989-03
シリーズ	国立国語研究所研究発表会 ; 昭和63年度
URL	http://doi.org/10.15084/00002884

方言地図作成史からみた特色

小林 隆

1. 発表のねらい

- 1) 『方言文法全国地図』の特色を述べる。
- 2) 方言地理学の研究過程として… a. 調査, b. 地図化, c. 解釈…このうち b. の部分に焦点をあてる。
- 3) 日本の方言地図作成史の流れの中で考える。

2. 『方言文法全国地図』作成上の方針

2. 1. 高度な資料性をもち、作図法を明示した方言地図集の作成をめざす。
2. 2. 具体的な方法
 - 1) 語形採用規則の設定および明示
 - 2) 語形統合規則の設定および明示
 - 3) 語形の統合を抑えた詳細な呈示
 - 4) 語形間の対応と記号間の対応との平行性を重視した記号化
 - 5) 「資料一覧」(統合した語形の内容と地点, 地図化部分の前後の形態, 注記)の公表
 - 6) 語形の処理, 分類, 記号化に的をしばった各図の解説

3. 資料地図か解釈地図か

3. 1. 資料地図… 静的地図。通時的解釈を抑えた語形の呈示。一定の基準により各調査地点の回答を網羅的に示す。いろいろな読み方を許す地図。客観的。
解釈地図… 動的地図。通時的解釈の結果を表現した地図。解釈に応じて語形の採用・統合・記号化を自由に行う。解釈者の特定の読み方を伝える地図
主観的。

3. 2. 一つの有力な考え

1) 方言地図=解釈地図:

方言地図は解釈地図でなければならない。ただ単に情報を地図の上に載せたものは真の「方言地図」とは言えない(グロータース1962, 柴田1969など)。

2) この考えの根底にある考え:

方言地図は方言地理学の手段であり, 方言地理学は歴史言語学の一分野である。

3. 3. 問題提起

1) 方言地図の役割から:

上記の考え方は方言地図の役割を狭く見すぎているのではないか。方言地図の利用はもっと広範囲に及ぶのではないか。…方言区画（分類）論，構造方言学への地理的視野の提供，共通語の地理的背景，他の文化事象との相関，日本語教育，…

2) 研究の科学性から：

検証可能であることが科学的であることの一つの条件。解釈地図のみでは検証が不可能。また，解釈の道は一つとはかぎらない。…例えば，柴田1969の糸魚川言語地図の「肩車」の解釈に対して，徳川1986は別の解釈を示す。また，その再解釈のチャンスは徳川氏という共同調査者にしか与えられていなかった。

3) 解釈地図重視の与えた影響から：

解釈地図らしきもの（語形の統合，特定の分布の強調…）を作りながら，その解釈を説明しない作品が目立つ。逆に見れば，徹底的な解釈とその地図への反映には相当な知的労力が必要とされる。

3. 4. 『方言文法全国地図』の考え

解釈地図は資料地図の上に立脚すべきであり，解釈地図の前提として資料地図が公表される必要がある（小野1970）。『方言文法全国地図』は，この資料地図の段階に位置付けられるべきものである。

4. 資料地図としての『方言文法全国地図』

4. 1. 高度な資料性をめざして採用した方法 → 2. 2. を参照。

4. 2. 特に記号化の原理について

1) 記号化の着眼点：

A. 語形の共時的性格… a. 形態，b. 語構成，c. 発想法，…

B. 語形の通時的性格… a. 系統…

C. 語形の分布… a. 相対性（特定の分布を目立たせる記号）

b. 絶対性（地域を表す記号）

2) 従来の方法：

・『日本言語地図』…A, B, Caなどを適当に配慮。AとCaが衝突するときには後者を優先（佐藤1986）。

『瀬戸内海言語図巻』『関東地方域方言事象分布地図』…A, B, Caの他，Cbを重視。

・なるべく単純な原理によるのがよい。

複数の原理の同時適用は可能か疑問（特に『瀬戸内海…』『関東地方域…』の方法）。

B, Caの重視はすでに解釈に踏込んでいる。

3) 『方言文法全国地図』の方法：

基本的には『日本言語地図』の方法を踏襲。しかし，とりわけAaの重視を打

出す。すなわち、形態間の対応と記号間の対応との平行性を、他の着眼点にもまして尊重する。そのために、『日本言語地図』の記号を体系的、かつ大幅に増加する。

4) 一つの批判とそれに対する答え：

- ・語形間の距離に基づき記号の詳細な体系化をはかることによって描かれた地図は、『フランス言語図巻』のような語形をそのまま載せた地図と変わらない（鏡味1972など）。

- ・上記の考え方は、

資料地図（語形記載） 資料地図（記号化）／解釈地図（記号化）
である。しかし、分布を見せる効果としては、

資料地図（語形記載）／資料地図（記号化） 解釈地図（記号化）
ではないか。記号化による視覚効果の格段の増大を過小評価すべきではない。

5. 作図法の明示

5. 1. ブラックボックスとしての作図法

資料の整理、地図化の方法については十分な検討がなされず、「名人芸」にたよる面が大きかった。これらの部分を議論のまないたにのせることが必要である（加藤1972）。

5. 2. 明示すべき作図法の柱

- 1) 語形の採用の仕方
- 2) 語形のまとめ方
- 3) 記号の与え方

- ・以上の3つの方法の明示は、資料地図、解釈地図を問わず必要である。

5. 3. 従来の地図について

	語形採用基準	語形まとめ方	記号化原理
1965 『中国地方五県言語地図』	—	—	—
1966～74 『日本言語地図』	△	—	△
1974(76) 『瀬戸内海言語図巻』	○	△	○
1974・76 『関東地方域方言…』	—	△	○
1988 『糸魚川言語地図』(データ付)	(—)	(—)	—

- ・局地図に至っては、いずれも不十分なものが多い。

- ・加藤1972で批判された状況は、その後『瀬戸内海言語図巻』など改善された地図も現れたが、全体に満足のゆくものにはなっていない。

5. 4. 『方言文法全国地図』の場合

上記1) 2) 3) の各柱について一定の基準、原理を設定し、それらによって資料の処理、地図化を行った。かつ、それらの基準、原理を明示した。

6. 結論

『方言文法全国地図』は、日本の方言地図において一つの有力な立場である解釈地図重視の立場をとらず、資料地図の方向を高度に発展させようと試みたものである。また従来、不徹底であった作図法の明示を行い、これを議論の対象に据えることを可能にした点で、これまでの地図に見られた不透明さを払拭しようとした意図したものである。

『方言文法全国地図』は、日本の方言地図作成史上、以上のような特色を有するものと言える。

7. おわりに

以上のような地図作成法に関することは、方言地理学にとっては基礎的な問題の部類に属する。このような問題をいまだ検討せざるをえないところに、日本の方言地理学のレベルの一面があるとも言える。これを機に、方言地図作成法についての議論が高まることを期待したい。

<参考文献>

- 小野米一 1970 「九州東部方言の方言地理学的研究（Ⅱ）－言語地図の製作－」
- 鏡味明克 1972 「分布解釈による言語地図の記号の体系的編成について」
- 加藤正信 1972 「方言間対応による分布処理」
- グロータース 1962 「方言地図の書き方と読み方」
- 佐藤亮一 1986 「書評 藤原与一著『方言学原論』」
- 柴田武 1969 『言語地理学の方法』
- 徳川宗賢 1986 「方言地図とその解釈」